九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

干宝と郭璞 ： 『捜神記』所収郭璞記事をめぐって

雁木, 誠
九州大学大学院人文科学府 ： 博士後期課程

https://doi.org/10.15017/1498238

出版情報：中国文学論集. 43, pp.31-40, 2014-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

干宝と郭璞
――『捜神記』所収郭璞記事をめぐって――

雁木　誠

干宝（字は令升。？～三三六？）編による六朝志怪の代表作『捜神記』中には、後漢・三国以前の記事だけでなく、干宝自身が生きた西晋末から東晋にかけての記録も存在する。そのうち、彼と直接交流があった人物として郭璞（字は景純。二七六～三二四）の記事が数則確認される。郭璞は『穆天子伝』『山海経』等に注を施し、自身も『文選』に「江賦」「遊仙詩」が収められており、晋代を代表する文人と呼べる。一方、干宝は『捜神記』を編じながらも、『晋紀』および『文選』所収の「晋紀総論」を著しており、歴史を記録するという意識のもとそれらを著した史官であった。では、一見して立場の全く異なるこの二人の間には如何なる共通点が存在するのか。また、『捜神記』中に郭璞に纏わる故事が見えることは、如何なる意味を持つのか。

本稿は干宝と郭璞との交流や周囲との関係、およびこの『捜神記』中にある郭璞に纏わる故事を通して、干宝、郭璞をはじめとした東晋初期の史書編纂事業のための文人の史官登用とその影響、及び『捜神記』所収の郭璞記事の性質、ないし郭璞故事の伝播について考察したい。

一　郭璞の経歴と東晋初年の史書編纂事業

郭璞に関しては興膳宏氏を初め多くの先行研究が存在する。[1] ここではそれらを参考としつつ彼の経歴を略述する。唐修『晋書』（以下、『晋書』と称す）巻七二の郭璞伝に拠れば、郭璞は河東聞喜（山西省南部）の出身、父瑗は

尚書都令史、建平太守に終わった。若い頃より経術を好み、また詞賦にも優れていた郭璞は、特に陰陽算暦による占いを得意とし、その手腕は占術者として名を馳せた漢の京房、三国魏の管輅を凌ぐほどであったという。『晋書』郭璞伝の前半、彼の渡江以前の記述においても、郭璞が占術を披露する記事が幾つか見える。

八王の乱を逃れるため長江を渡った郭璞は、宣城太守であった殷祐に召されて参軍となる。その後王導幕下にて参軍をつとめたのち、「江賦」が世間の評判を得、さらに「南郊賦」が元帝司馬睿の目にとまり、郭璞は著作佐郎（或いは佐著作郎とも）の任に就くこととなる。則ち、

璞著江賦、其辭甚偉、爲世所稱。後復作南郊賦、帝見而嘉之、以爲著作佐郎。

璞「江賦」を著するに、其の辞甚だ偉にして、世の称する所と為る。後 復た「南郊賦」を作り、帝見て之を嘉しとし、以て著作佐郎と為す。

とするものである。郭璞と干宝は、恐らくこの時点でお互いを知り得たものと思われる。何故なら、この東晋初年の元帝による著作郎（或いは著作佐郎）の登用は、晋史の編修という東晋王朝の重要な事業のためであり、後述するように干宝もこの前後、王導の推挙により同じく佐著作郎として国史編纂の任に就いているのである。また、この国史編纂事業は、『晋書』八六巻（『隋書』経籍志に拠る。以下同じ。現在は散佚）の編者王隠[2]や、『晋陽秋』三二巻（現在は散佚）を著した孫盛等が参加しており、後世種々の史書が編纂される切欠となる重要な一局面なのである。

これらの国史編纂事業にあって、郭璞の立場は如何なるものだったのか。『隋書』経籍志を見る限り、彼が干宝『晋紀』、王隠『晋書』等の紀伝体、編年体と目される史書を編んだという記録は見当たらない。『晋書』本伝においても、「頃之、遷尚書郎。數言便宜、多所匡益。明帝之在東宮、與溫嶠、庾亮並有布井之好。…（頃之くして、尚書郎に遷る。数しば便宜を言ひて、匡益する所多し。明帝の東宮に在るや、温嶠、庾亮と並びに布井の好みあり。…）」とし、程なくして郭璞が尚書郎となったことが記される。元帝の長子司馬紹（明帝）が即位するのは太寧元年（三二三年）三月の事であるため、郭璞が史官の任を離れるまでは凡そ数年であったと考えられるが、この史官登用が彼にとって何の影響も与えなかったとも想定できない。則ち、冒頭にて触れたように、郭璞には多数の書籍への注釈が存在するが、うち、『穆天子伝』は西晋の太康二年（二八一年、『晋書』束晳伝に拠る）に出土した所謂汲冢書

であり、当時の文人に多大な衝撃を与えた書物である。[3] その他、郭璞による注釈は『爾雅』『山海経』をはじめ、『楚辞』、さらには前漢・司馬相如の「子虚賦」「上林賦」にまでおよび、[4] これら大量の書籍を閲覧し、或いはそれらに注を附すには、ある程度纏まった量の蔵書が必要不可欠だと考えられる。そしてそれは、郭璞が国史編纂を職務とする著作佐郎になってはじめて宮中の図書を閲覧出来たことに拠るのではないだろうか。

尚書郎に遷った後の郭璞は、母の喪に服するために職を辞したが、後に王敦によって記室参軍となり、そのまま王敦の乱に巻き込まれて殺されることとなる。『晋書』にはこの郭璞の最期に関しても、彼の占術に関する記述が記されている。生来彼が陰陽算歴に長ける事を起点として、同書では陰陽算術による占術に纏わる記事が一貫して取り上げられるが、郭璞が大量の注釈を遺したという学術的側面について考える際、彼が東晋初年に著作佐郎として登用されたことは看過できない重要な要素となるのである。

二　干宝と郭璞との交流

本章では、干宝と郭璞との関係について述べるが、併せて干宝の経歴についても少し触れる。『晋書』巻八二、干宝伝に拠れば、干宝もまた若きより学問に優れ、陰陽術数を好んだとされるが、その名が広く知られる事になる契機は、前章にて言及した元帝による東晋王朝の成立である。即ち、建武元年（三一七）に建業にて東晋王朝が成立した際、時の中書監であった王導が、王朝再建のためにまず史官を登用すべきだと上疏した事である。則ち、

中興草創、未置史官。中書監王導上疏曰、……陛下聖明、當中興之盛、宜建立國史、撰集帝紀、上敷祖宗之烈、下紀佐命之勳、務以實錄、爲後代之準、厭率土之望、悦人神之心、斯誠雍熙之至美、王者之弘基也。宜備史官、敕佐著作郎干寶等漸就撰集。元帝納焉。寶於是始領國史。

中興の草創、未だ史官を置かず。中書監王導上疏して曰く、……陛下は聖明にして、中興の盛んなるに当たれり。宜しく国史を建立し、帝紀を撰集し、上は祖宗の烈を敷き、下は佐明の勲を紀し、務むるに実録を以てし、後代の準と為し、率土の望を厭たし、人神の心を悦ばしむべし。斯れ誠に雍熙の至美、王者の弘基な

り。宜しく史官を備へ、佐著作郎干宝等に敕し、漸めて撰集に就かしむべしと。元帝焉を納む。宝　是に於いて始めて国史を領す。

と、国朝再興にはまず「国史」を編纂することが肝要であるとして、史官を設置し、晋史の編纂に従事させることを説いたのである。かくして干宝は佐著作郎として王隠らと共に国史編纂の任に就いたのである。[5]

干宝と郭璞は、前章で述べたようにこの折に同僚となったと考えられるが、両者の直接的な交流は『晋書』郭璞伝にみえる。則ち、

……然性軽易、不修威儀、嗜酒好色、時或過度。著作郎干寶常誡之曰、此非適性之道也。璞曰、吾所受有本限、用之恒恐不得盡、卿乃憂酒色之爲患乎。

……然るに性は軽易にして、威儀を修めず、酒を嗜み色を好むこと、時に或いは度を過ぐ。著作郎干宝常て之を誡めて曰く、此れ性に適するの道に非ざるなりと。璞曰く、吾が受くる所　本限有りて、之を用って恒に尽くすを得ざらんことを恐る。卿　乃ち酒色の患を為さんことを憂ふるか。

と記すものである。軽薄な性格でたびたび遊蕩の度が過ぎた郭璞を干宝が諫めたところ、自分は思うさま人生を全うしたい、と述べたやりとりである。

この記事は郭璞が没する数年前、前章で述べた明帝が未だ皇太子であった頃のものと思われるが、郭璞が干宝の忠告に上記のように述べたのも、或いは自分の死期を察した事から来るのかもしれない。[6]一方干宝も『晋書』における彼の事跡からは郭璞とのこれ以上の交流を見いだすことは出来ないが、前章でも確認したように、二人は同じ作著佐郎に就いていたことからも、干宝が『捜神記』を編纂する際、その取材源として郭璞から記事のもととなる話を聞き及んでいた可能性も考えられるのである。

三　『捜神記』所収の郭璞記事

原『捜神記』中にあったと考えられる郭璞記事は三則確認することが出来る。[7]いずれも『法苑珠林』『太平広記』

等にその出典を『捜神記』と明記して記載されるものだが、中には『晋書』郭璞伝に同様の故事が伝えられるものもある。これは、郭璞伝に限らず『晋書』の藍本としてそれ以前に成立した晋代に関する歴史書（或いは『捜神記』等）が使用されたことに由来する[8]。以下、各記事について考察を加える[9]。

晉永嘉五年十一月、有偃鼠出延陵。郭璞筮之、遇臨之益。曰此郡東縣當有妖人、欲搆制者。尋亦自死矣。

晋の永嘉五年十一月、偃鼠の延陵に出づる有り。郭璞之を筮すに、臨より益に之くに遇う。曰く此の郡の東県に当に妖人の、制を搆（かま）へんと欲する者有るべし。尋（つ）いで亦た自ら死せんと。

（『法苑珠林』巻六三所引『捜神記』）

楊州別駕顧球娣、生十年便病、至年五十餘、令郭璞筮之。得大過之升。其辭曰、大過卦者義不嘉、塚墓枯楊無英華。振動遊魂見龍車、身被重累嬰天邪。法由斬樹殺靈蛇、非已之咎先人瑕。案卦論之可奈何。球乃訪跡其家事、先世曾伐大樹、得大蛇殺之、女便病。病後有群鳥數千迴翔屋上、人皆怪之、不知何故。有縣農行過舍邊、仰視、見龍牽車、五色晃爛、甚大非常。有頃遂滅。

楊州別駕 顧球が娣、生くること十年にして便ち病して、年五十余に至れるに、郭璞をして之を筮ぜしむ。大過より升に之くを得たり。其の辞に曰く、大過の卦は義 嘉からず、塚墓が枯楊に英華無し。遊魂振動して龍車を見、身は重累を被り天邪に嬰（か）かる。樹を斬りて霊蛇を殺すに由るに法りて、己の咎に非ずして先人が瑕なり。卦を案ずるに之を論ずるも奈何とすべしと。球乃ち跡を其の家事に訪ふに、先世曾て大樹を伐り、大蛇を得て之を殺すに、女便ち病めり。病みて後 群鳥数千 屋上を迴翔する有りて、人皆な之を怪しむも、何故かを知らず。県農の舎辺を行き過ぎる有るに、仰ぎて視れば、龍の車を牽き、五色晃爛、甚だ大にして常に非ざるを見る。頃有りて遂に滅せり。

（『太平広記』巻二一六所引『捜神記』）

趙固所乘馬忽死。固甚悲惜之、問郭璞。璞曰、可遣數十人持竹竿。東行三十里、當有山陵林樹。便攪打之、當有一物出、急抱將歸。於是如璞言、果得一物似猴。入門見死馬跳梁、走往死馬頭噓吸其鼻、馬即起。亦不復見猴。

趙固の乗る所の馬忽ち死せり、固 甚だ之を悲惜して、郭璞に問へり。璞曰く、数十人をして竹竿を持たしむべし。東ののかた三十里を行けば、当に山陵林樹あるべし。則ち之を擾（だ）し打てば、当に一物の出る有らん、

急ぎ抱きて將に帰らん。是に於いて璞が言の如くせば、果たして一物の猴に似たるを得る。門に入りて死馬を見るに跳梁し、走りて死馬の頭に往きて其の鼻を噓吸すれば、馬即ち起てり。亦た復た猴を見ず。

（『藝文類聚』巻九三所引『捜神記』）

以上三つの記事は、いずれもそれぞれ起こった怪事件に対して郭璞が占術を用いてその原因、もしくは解決策を述べるというものである。事件の起こった時期は、一つ目の鼠に纏わる記事は西晋末の永嘉五年（三一一年）、則ち西晋の末年である。二つ目の事件に関しても、依頼者の顧球は元帝の建武元年（三一七年）に没していることから[10]、それ以前、則ち西晋末期ないし東晋王朝成立後間もない時期に属する記事だと考えられ、三つ目の趙固の記事も、『晋書』郭璞伝に彼が長江を渡り南へ逃れる前の事件として、より詳細な記事が見える[11]ことからも、これら原『捜神記』にあったと考えられる郭璞故事が、いずれも東晋王朝以前（或いは直後）に起きた事件であることがわかるのである。

上述の『捜神記』郭璞故事がすべて東晋王朝成立前後だとすれば、記事が『捜神記』に収録される経緯も自ずと限定されるのではなかろうか。すなわち、先に述べたように、これらの記事の取材源として考えられるものとして、編者干宝が郭璞より直接、或いは第三者を介して間接的に聞き及んだ可能性が推測されるのである。では、郭璞の故事、事跡について記述した書物は、『捜神記』が最初となるのであろうか。

四　郭璞故事の継承と『郭璞別伝』の存在

前章にて、原『捜神記』にあったと考えられる郭璞故事がいずれも東晋王朝成立前後のものであり、これらが『捜神記』に収録される経緯として編者干宝が直接ないし第三者を通じて書き記した可能性を提示した。本章では、郭璞の故事、ないし彼の事跡が如何にして伝承されたかについて考察したい。

郭璞の事跡を記す書籍の一つの完成形は言うまでも無く唐修『晋書』郭璞伝であり、その藍本の一つとして『捜神記』が関与したであろうことは先に触れた。では、前章にて述べた『捜神記』に所収される郭璞故事、或いは『晋

書』郭璞伝に見えるような彼の事跡が記事として文字化されたのは『捜神記』が最初であろうか。

当然ながら、『捜神記』に収録された郭璞故事はごく限定的なものであり、或いは臧榮緒『晋書』百十一巻（『隋書経籍志』に拠る。現在は散佚）等の東晋以降、唐修『晋書』までに成立した晋代を記す史書に郭璞が立伝されていたことも想定される。しかし、郭璞没後、比較的早い時期に彼の事跡を伝えるものとして成立したのではないかと想像される書籍がある。その手がかりとなるのが劉宋の劉義慶撰の『世説新語』術解篇、梁の劉孝標注に残存する『（郭）璞別伝』なる書物の佚文である。

郭景純過江、居于暨陽。墓去水不盈百歩、時人以爲近水。景純曰、將當爲陸。今沙漲、去墓數十里、皆爲桑田。其詩曰、北阜烈烈、巨海混混。壘壘三墳、唯母與昆。

（劉孝標注）璞別傳曰、璞少好經術、明解卜筮。永嘉中海内將亂、璞投策歎曰、黔黎將同異類矣。便結親暱十餘家、南渡江、居於暨陽。

郭景純江を過ぎて、暨陽に居る。墓は水を去ること百歩に盈たざるに、時人以って水に近しと為す。景純曰く、将に当に陸と為るべし。今 沙漲り、墓を去ること数十里、皆な桑田と為る。其の詩に曰く、北阜烈烈にして、巨海混混たり。壘壘たる三墳、唯だ母と昆とのみと。

（劉孝標注）（郭）璞別伝に曰く、璞 少きより経術を好み、卜筮に明解なり。永嘉中 海内 将に乱れんとするに、璞策を投じて歎じて曰く、黔黎将に異類と同じからんとするかと。便ち親暱 十余家と結して、南のかた江を渡り、暨陽に居る。

これは、郭璞が母の喪に服していた際の記事であり、「術解篇」の名が示すとおり、これもまた郭璞の予言（恐らくは彼の得意とした占術）が的中した事を記すものである。さらに、それに附された劉孝標注においては、その経緯として郭璞が長江を渡り暨陽（現在の江蘇省江陰市）に移り住んだのは永嘉の乱を逃れるためであったことが記される。ここで問題となるのは、郭璞が南に遷る経緯を記したものとして『郭璞別伝』なる書物がここで引用されているのことある。

この『郭璞別伝』は『隋書』経籍志にもその名が見えず、早くに散佚したと考えられるが、注目すべきは「別伝」

という形式である。則ち、個人の事跡を単行の形式で著したと思われる「別伝」は、これに先立つ形で『管輅別伝』『華佗別伝』等が『三国志』裴松之注に散見され、しかも『管輅別伝』の著者はその弟管辰であり（『隋書』経籍志）、単行本としての個人の列伝が、記される人物に比較的近い人物によって編まれているのである。

この視点に立って『郭璞別伝』の著者、或いは成立年代を考えるなら、それもまた郭璞が没してさほど時間を経ないうちに成立したと考えられるのではないだろうか。仮にこの書物が郭璞没後比較的早い段階、干宝が存命していた時期に成書していたとするならば、それは『捜神記』、あるいはこの時期の諸官の編纂した史書に記事を提供することとなったと想定されるのである。

おわりに

以上、干宝、郭璞の経歴と原『捜神記』所収と考えられる郭璞記事を軸として、両者の史書編纂事業における立場、及び郭璞記事の伝承経路について考察した。

『捜神記』の成書過程について、小南一郎氏はかつてその取材源として中下級官僚階層による「語りの場」での話題提供が想定されることを指摘した[12]。『捜神記』の編纂に、小南氏の指摘するような当時の社会背景が存在することも考えられるが、干宝の「史官」という立場、さらには『捜神記』中には『漢書』五行志等をはじめとする数多くの書籍からの引用が見える事を踏まえると、その構成要素として、書物引用もまた記事の来源として重要視される要素なのである。

郭璞のような個人が主人公となる記事（例えば管輅の故事は『太平広記』巻三五九に『捜神記』記事として見える）の『捜神記』への伝承経路として、上述のような個人の列伝等をも干宝が参照した可能性はあるのではないだろうか。その経路において、『郭璞別伝』等の書物はそういった記事から記事への伝承を伝える役割を果たしたといえるであろう。

注

（1）郭璞の経歴と作品、及びその時代背景について述べたものに興膳宏「詩人としての郭璞」（『中国文学報』第十九冊、京都大学文学部中国文学会、一九六三年。のち『乱世を生きる詩人たち――六朝詩人論――』研文出版、二〇〇一年に所収）がある。また、郭璞の諸作品をより詳細に分析したものとして佐竹保子『西晋文学論』（汲古書院、二〇〇二年）、大平幸代「霊妙なる長江――郭璞「江賦」の表現と世界認識」（『日本中国学会報』第五五号、二〇〇三年）等がある。郭璞による『山海経』注釈に着目した研究として、『山海経図賛』および『山海経』注を中心に論じたものに松浦史子『漢魏六朝における『山海経』の受容とその展開――神話の時空と文学・図像』（汲古書院、二〇一二年）がある。

（2）『晋書』巻八二・王隠伝に「太興初、典章稍備。乃召隠及郭璞倶爲著作郎、令撰晉史（太興初め、典章稍く備われり。乃ち（王）隠及び郭璞を召して倶に著作郎と為す）」とあり、王隠と郭璞が同じく史官として登用されたことが分かる。

（3）汲冢書の発見、及び当時の学術については、吉川忠夫「汲冢書発見前後」（『東方学報』第七一冊、京都大学人文科学研究所、一九九九年）、小沢賢二「汲冢竹書再考」（『中国研究集刊』第四二号、大阪大学中国哲学研究室、二〇〇六年）に詳しい。

（4）郭璞が注を附したとされる書籍については『隋書』経籍志を参照。なお、同書の集部総集類に「梁有郭璞注子虚上林賦一巻」とあり、現行の『文選』巻七・八「子虚賦」「上林賦」にも郭璞注が引用される。

（5）干宝と王隠の関係については拙稿「『捜神記』の編纂過程について――淳于智故事を例として――」（『中国文学論集』第三九号、九州大学中国文学会、二〇一〇年）にて言及した。

（6）『晋書』郭璞伝に「初、璞毎言殺我者山宗。至是果有姓崇者構璞於敦。……初、璞中興初行經越城間、遇一人。呼其姓名、因以袴褶遺之。其人辭不受。璞曰、但取、後自當知。其人遂受而去。至是、果此人行刑（初め、璞毎に我を殺す者は山宗と言ふ。是に至りて果たして崇を姓とする者有りて璞を（王）敦に構す。……初め、璞中興の初め、行きて越城の間を経、一人に遇ふ。其の姓名を呼びて、因りて袴褶を以て之に遺る。其の人辞して受けず。璞曰く、但だ取れ、後自ずから当に知るべしと。其の人遂に受けて去れり。是に至りて、果たして此の人刑を行へり）」と。自らを

処刑する運命の人物に衣を渡すというこの故事は『北堂書鈔』巻一二九、『太平御覧』巻七二八所引『続捜神記』等にも見える。

（7）原『捜神記』に収録されていたかどうかの判断は李剣国『新輯捜神記』（中華書局、二〇〇七年）を参考とした。二〇巻本『捜神記』においては巻三に四則見えるが、うち二則（巻三第六一、六四則）は『藝文類聚』をはじめとする諸類書に『捜神記』の記事としては引用されない。明代に二〇巻本『捜神記』が再輯された際に増補された偽文と考えられる。李剣国前掲本も同様の見解を示す。

（8）『捜神記』と歴史書、特に『晋書』『漢書』五行志等に見える災異記事との関連性について考察したものとして、河野貴美子「『捜神記』の語る歴史――史書五行志との関係――」（『二松』第十六号、二松学舎大学大学院文学研究科、二〇〇二年）がある。

（9）『晋書』等にみえる郭璞に纏わる故事を中心として郭璞像の形成について考察した先行研究として、大平幸代「「郭璞」説話の形成」（『中国文学報』第五九冊、京都大学文学部中国文学会、一九九九年）がある。

（10）『晋書』元帝紀、建武元年に「七月、散騎侍郎朱嵩、尚書郎顧球卒。帝痛之、將爲舉哀。……（七月、散騎侍郎朱嵩、尚書郎顧球卒す。帝之を痛み、将に為に挙哀せんとす。……）」と。

（11）『晋書』郭璞伝にみえる郭璞が趙固の馬を生き返らせた話は以下の通り。なお、これと同系統と思われる記事が『太平御覧』巻八九七所引『続捜神記』にも見える。

會固所乘良馬死、固惜之、不接賓客。璞至、門吏不爲通。璞曰、吾能活馬。吏驚入白固。固趨出曰、君能活吾馬乎。璞曰、得健夫二三十人、皆持長竿、東行三十里、有丘林社廟者。便以竿打拍、當得一物。宜急持歸。得此、馬活矣。固如其言、果得一物似猴。持歸、此物見死馬、便噓吸其鼻。頃之馬起、奮迅嘶鳴、食如常。不復見向物。固奇之、厚加資給。

（12）小南一郎「干宝「捜神記」の編纂（下）」（『東方学報』第七十冊、京都大学人文科学研究所、一九九八年）